

平成 26 年度「世界エイズデー」キャンペーンテーマ・フォーラム報告（第 2 回） 「一緒にテーマを考えよう」

2014 年 6 月 11 日（水）18:30～20:00 大阪検査相談・啓発・支援センター「chotCAST なんば」
出席者 24 名

■開会あいさつ、趣旨説明（公益財団法人エイズ予防財団 宮田一雄理事）

- ・平成 22 年度からテーマ案策定プロセスを見直し、現場に近いところから意見を積み上げ、テーマ候補案を決めてきた。エイズの流行の現状と対策の課題、その解決策、今年度のテーマの方向性などについて議論したい。東京・大阪の 2 回のフォーラムおよび API-Net に寄せられた意見を集約し、7 月のテーマ検討会議で候補案を策定してエイズ予防財団から厚生労働省に提案したい。
- ・議論の参考に HIV/エイズ分野でこの 1 年ほどに起きた出来事をまとめた。5 月 23 日のエイズ動向委員会で開催された 2013 年新規 HIV 感染者・エイズ患者報告数の確定値は過去最多だった。（資料 1）
- ・5 月 13 日に開催した東京フォーラムの要約と API-Net に寄せられた意見紹介
- ・API-Net での意見募集および過去のテーマ紹介

ディスカッション

- 司会・進行（特定非営利活動法人日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス 長谷川博史代表）
現場の感覚を踏まえた意見を聞かせていただきたい。医療、予防、ケア、啓発など様々な現場に関わっている方がお集まりだと思うので、そこで感じることを話していただきたい。

- 参加者からは以下のような意見が出された。

【現場で感じる問題】

《意識のギャップについて》

- ・エイズ対策予算の減少、世間の関心の低下、ボランティア獲得の難しさを痛感する。
 - 関心の低下は大きな課題。では、どんな関心を持ってもらったらよいか。
 - ネット上で情報を得られてもリアリティはない。身近に陽性者が存在していることを幾ら伝えても、世の中はリアリティを感じていない。10 代のコンドーム使用率低下も耳にする。関心を持つのは不安のある人だけかもしれない。
- ・施策がやや予防に偏っているように思う。HIV 陽性告知後のアフターケアがあることを知らず、怖くて検査に行けない人が多数いる。陽性者への偏見を払拭する取り組みが必要だ。実際に支障なく社会生活を送っている姿、陽性者の声を反映させた行政の制度等があるのに伝わってこない。検査に向かわないのはそのためではないか。
 - 予防だけ突出しても支援がないと成り立たない。予防と支援の中で何が足りないのか。
- ・周囲では「HIV に感染しても死なない」「薬を飲めばだいじょうぶ」という感覚が強く、投薬の費用やその大変さも含め、危機感がない。「2 日に 1 回飲めばよい薬があるのでしょうか？」などと誤った情報が散りばめられている。どう適切な情報を出していったらよいか。
 - 啓発には楽観と悲観がついてまわる。ある程度情報が行き渡ると、人は自分に都合のよい情報だけつまみ食いしがちだ。楽観によって予防にも当事者支援にも目が向かなくなっているのかもしれない。

- ・陽性者支援の様子がわかれば、検査に行く人も増えるだろうという意見は納得できる。手術等の診療拒否事例もあり、現場ではエイズ対策への危機感がある。しかし管轄の上層部は「いまだにそんなことがあるのですか？」という意識だ。学校の先生は性教育のあり方やセクシュアリティに関する相談の対応に悩んでいる。現場と上層部に温度差と落差がある。
 - HIV/エイズに携わっている人とそうでない人の意識のギャップをどう縮めていくか。
- ・慢性疾患という言葉が一人歩きをしているように思う。「感染したら、薬を飲んで暮らせばよいのでしょうか？」という声をよく聞く。陽性者支援のケースカンファでは、二進も三進もいかないケースも時にある。訪問看護師が関わっていてもケアが届かないときがある。そこには行政が関わっていないといけない。また若年層に啓発を行う必要があるが、教育委員会との連携も難しい。
 - 現場で個人として感じる皮膚感覚が大切だ。医療者は医療の現場、当事者は当事者の視点で引きずられるが、それらは常に裏表になる。例えば、怖いから検査を受けない、怖くない病気だよと伝えると今度は楽観から検査を受けない。そうなりがちだ。当事者と一般予防とで問題は別なのだろうか。
- ・医療の現場では、陽性者にはゲイの人が多く。一部には夫から感染した女性、海外で感染した男性などがいる。診察室では日々の生活をどうするか、HIV とともにどう生きるか、医療や生活の大変さ、などの話になる。慢性疾患とか楽観という話ではない。
 - ゲイの人たちには比較的、情報が届いている気がする。伝わっているからこそ楽観があるのかもしれない。
- ・NGO で活動をしているが、中高年で家庭を持っていたり、女装をしたりする人 (MSM) がいて、ゲイ、バイセクシュアル向けのメッセージやビジュアル表現だと、他人事となり情報が入っていないことがある。一般的に自分のこととして受け止めやすいメッセージが必要ではないか。
 - キャンペーンテーマ自体を MSM 限定に設定したことはない。一般層にも伝わりやすいテーマ設定をしていく必要があるだろう。
- ・HIV 予防啓発のトークイベントを行っている。ある男性の話では、女性にコンドームの使用をすすめたら、「ピルを飲んでいるからだいじょうぶ」と断られたという。コンドームは感染予防ではなく避妊の道具とする認識もまだ多い。社会の全般的な意識が低下しているのではないか。
 - コンドームは避妊具として認識し、感染予防として認識しない傾向はある。

《昨年度のテーマ「恋愛の数だけ HIV を語ろう」について》

- ・一昨年度のテーマは「“AIDS” GOES ON... ～エイズは続いている～」で現状認識だった。昨年度は「語る」という行動と「恋愛」がキーワードで魅力的だったのに、実際には期待したほど活用されなかった。
 - 「恋愛の数だけ HIV を語ろう」というテーマを見て、子供の頃に見た「カレシの元カノの元カレを、知っていますか。」のCMを思い出した。接客をしていて思うのは、20代のほうがコンドームをつけないと性感染症にかかる、という危機感を持っている。40代～50代の遊びなれた人のほうが予防行動はとっておらず、危機感はないと思う。
 - 若い世代と中高年がスマホを通じていきなり出会うこともある。
- ・自分自身は当事者でもなく、仕事でも現場でも HIV に関わっていないのだが、興味があって参加した。まだ危機感を持っている人は少ない気がする。ここでは行政や医療、支援など様々な立場の人の意見が聞けるので、吸収して意識を高めていきたいと思う。
 - 日頃 HIV に関わっていない人がどう感じているかが大切。どんなメッセージだと意識が向くだろうか。
 - 行きずりの男性と関係を持つ友人がいる。コンドームをせずに20人くらいと関係があったようだが、「そう簡単に感染しないでしょう」と心配する様子もない。若い人に危機感を持ってもらうにはどうしたらよいか。

- 若い男女がどう感じているのか本当に知る必要がある。
- 「恋愛の数だけ HIV を語ろう」はやや抽象的なテーマなので、もう少しダイレクトに表現してみても、という意見もあるが、エイズ対策の現場と社会の一般的な意識にギャップが存在するので非常に難しい。現場でもフィールドによって感じるものが異なる。
- 「恋愛の数だけ HIV を語ろう」は綺麗だが、詩的すぎる。中高年層にもう少しガツンとくるような、ストレートなテーマでもよいのではないか。

《テーマの方向性について》

- ・これまでの意見交換から現場が非常に大切だということを改めて認識した。併せてコミュニティセンターの必要性も感じた。コミュニティセンターは公民館のようなところだが、個々の話それ自体が新しいトピックスである。メンタルケアや性同一障害など、世間で話題になる数年前からトピックスに上がっていた。今後はケアや予防の観点から、家族という関係性の中での中高年の HIV が語られる必要があると思う。
- ・街頭キャンペーンを実施し啓発グッズを配布したが、関心のある人とない人のギャップを実感した。HIV の情報に関わりたくない人はあからさまにグッズを突き返す。少しでも関心をもってもらえるよう、インパクトのあるメッセージが必要なかもしれない。
 - ゲイコミュニティのように周囲に陽性者がいるとダイレクトに伝わるが、心理的に HIV の情報を避ける人にはどう対処すべきか。伝えたいが、相手は避ける、このギャップをどう埋めるか。
 - 昨年度のテーマは綺麗すぎるという意見があった。みんなが恋愛に基づいたセックスをしているとは限らないからだろう。「恋愛の」と切り出されると、「行きずり」も含めそうでない人たちには届かない。予防に関わる人と陽性者支援に関わる人、両者一体ではなく別々に頑張っている、相乗効果が出ないことを懸念している。
- ・当事者になってはじめて、HIV とはこういうものかと知った。ボランティアで手伝いをしている。医療では、感染症内科のドクターと眼科や口腔外科のドクターとでは HIV の捉え方や認識にギャップがあるように感じる。
 - 病院の中でも HIV に関わりのある科とそうでない科では大きなギャップがある。
- ・学校の課題として学生に作品を制作してもらっている。公募展やポスター展を行ったが、恐怖を煽るようなビジュアルが出てくる。どう理解させたらよいか。
 - 関心をもった結果、ギャップがどう出てくるかが難しい。アートという媒体はいろいろな可能性が出てくるだろう。
- ・皆さんのご発言を整理して考えた。まず、「世間一般の関心の低さ・他人事感」と「現場・当事者のリアリティ」との間にギャップがある。現場・当事者のリアリティの中には、切実に困った状況やエイズに対する危機感を色濃く反映したリアリティと、それとは反対にリアリティがあるゆえの「それほど大変な病気ではない」という楽観がある。リアリティ自体も2層となっている。そして他人事感も2層ある。中高年層に見られがちな、自分には関係ないという他人事感と、知識不足からくる若年層等の他人事感である。キャンペーンではどこにアプローチするのかを考えてほしい。
- ・若年層向けの予防啓発を行っている。性感染症は遊んでいる人が罹るという偏見がある。しかし実際に受検すると、陽性だったらどうしようと毎回思う。検査を受けることで多くを知るのがよいのではないか。
- ・活動をしていて肌で感じるのは、自分たちの常識が一般の常識ではないことの歯がゆさだ。どう工夫したらよいか。昨年度のテーマに対する意見があったが、恋愛ではないセックスで感染している例がいっぱいある。大阪には「チカンアカン」というポスターがある。大阪的なベタな分かりやすいメッセージも面白い。検査時の陽性告知で感じるのは、若年層と中高年層では反応が違うこと。50歳以上の多くは、死ぬ病気と思っている。最新の情報が伝わっていないことを実感する。

- ・昨年 11 月下旬に報告された献血血液の輸血による感染の報道後に受検者数が増加した。啓発資料の作成や街頭キャンペーンではなかなか検査数が伸びなかった。先日の動向委員会の報告（過去最多）も含め、メディアの影響力の大きさを痛感している。12 月 1 日のエイズデー、あるいはレッドリボンの意味を世間ではどれだけの人が認識しているのだろうか。
- ・NGO でボランティア活動をするにあたり、まだ経験がないので勉強しに来た。現場の人がこうして話し合う場所があることを知り、今回は非常に良い経験となった。
- ・MSM に関心をもってもらうための活動をしてきた。MSM は陽性者が身近におり、自身が問題に直面しているので、関心を持ってもらえる。しかし、そうではない広い層へどう働きかけるのか。感染のリスクを伝えることが、本当に関心を引き出すきっかけになるのだろうか。そうでないフックをもっと捻り出したいと思う。

《まとめ》

- ・広く誰にでも伝わるようなテーマを考えると、かえって伝わらないことがある。テーマを 1 年だけで考えると難しいが、毎年積み重ねていけるので、今年度はこれを試そうといった手法も将来的には有り得る。エイズの流行への対応には、予防と支援の問題でも分かるように、一見、両立しないものを現実の中で両立させていける奥深さがある。本日はテーマ選定の土台となる様々な意見を聞かせていただくことができた。

■閉会あいさつ（公益財団法人エイズ予防財団 白阪琢磨理事）

本日は HIV に関わったことのない人からもご意見をいただけ、非常に新鮮な思いだった。このような会合は大変貴重だと思う。エイズ予防財団をご存じでない方もいらっしゃるかもしれないが、当財団の活動をもっと知っていただきたい。我々も思っている気持ちを行動に起こし、HIV/エイズの予防と支援のためにお役に立てる組織として、皆さんに活かしていただきたい。

本日はありがとうございました。